

モノをいう つながり力

宇治で「架け橋」上映会

情報弱者テーマ 監督トーク



上映会の後、手話で今の思いを紹介する今村彩子監督 (ゆめりあうじ)

災害時に情報が得られにくい聴覚障害者らの防災を考えるドキュメンタリー映画「架け橋 きこえなかつた3・11」(2013年制作、74分)の上映会が28日、宇治市の市民交流プラザ「ゆめりあうじ」で開かれた。上映会は障害者の就労を支援するNPO法人就労ネット「じゆめハウス」

(江寄美子代表)が企画。約100人が参加した。

自身も耳が聞こえない今村彩子監督(35)が、東日本大震災の11日後に宮城県を訪れて撮影を始めた。

主人公の小泉正壽さんは、自動車整備の仕事しながら県ろうあ協会の会長を務め、被災したろうあ者の支援や情報格

差をなくすために奔走。休む暇なく活動を続け、その年の12月に脳こうそくで倒れた。懸命にリハビリに励み、車を運転するまでに回復したが、整備士の仕事は断念した。

失意にめげず、ろうあ協会の会長として被災した会員を訪ね、励まし合う小泉さんの姿を2年4ヵ月かけて取材し、長

年訴えてきた県情報提供センターの設立につながったことや、災害下の情報弱者の問題に迫った。

今年1月、大阪でこの映画を見た「ゆめハウス」のスタッフが「作品に描かれた人のつながりをもっと多くの人に見てもらいたい」と、今村監督に京都で初の上映会開催を依頼した。

手話による監督トークでは、今村さんが「命にかかわる大事な情報に格差があるってはいけないことを作品を通して伝えたい」と映画製作の動機を説明。

「健聴者でも防災情報が聞けないところにいると同じ。盲ろうの人、外国人などいろんなケースを考えると、今は情報の差があるのは仕方が

ないと考えるようになった」と話した。その上で「どうすれば命を守るかを現実に考えた場合、人と人のつながり、絆が大切だと考えるようになった」と述べ、映画製作で出会った人たちのその後の生き方を合わせて紹介した。

【岡本幸一】